

計画 6-3

高崎山のニホンザルの食糧資源としての
森林の構造と季節的变化
長岡寿和（大分短期大学）

高崎山では過密になったニホンザルの採食により森林に被害が及んでいる。生息域の森林荒廃を示す具体的な例の一つとして、林床部に幼稚樹が生育できないほど、サルによる踏み堅めが認められた。

生息域の標高150mの地点と標高550mの地点で、獣道上の144カ所、獣道外の72カ所で山中式硬度計を用いて調査した。土壌の硬さは獣道上で平均 16.5 mm/cm^2 、獣道外では平均 12.8 mm/cm^2 とあきらかに差がみられた。特に獣道上では 27 mm/cm^2 という堅い土壌の地点があった。一般に山中式土壌硬度計示度で、植物の根の伸長が完全に阻害されるといわれるのは 22 mm/cm^2 以上の場所であるが、森林内部の獣道上では $22\sim 27\text{ mm/cm}^2$ という堅い土壌の地点が多数あった。

標高の違いで獣道上の土壌硬度に有意な差はなかったが、獣道外では標高の低い場所が柔らかく明らかな差がみられた。獣道上では標高の低いエサ場周辺と、山頂付近の土壌の堅さにほとんど差はみられなかった。

森林内のいたるところに獣道ができ、サルによる踏み堅めで幼稚樹も林床部にほとんど見られなかった。森林を構成するサルのエサとなる高木性の樹木は、採食のために花や実は観察できない状態である。現在のサルの個体数から森林を食糧資源として適正に管理して行くには限界にきていると思われる。

計画 6-4

ヤクシマザルオスにおける性行動と採食行動
の関連

松原 幹（京都大・霊長研・生態機構）

動物の繁殖行動による採食時間やエネルギー摂取への影響について、本年は直接的な繁殖・採食競合者が少ない高順位オスを対象に1日の時間配分について検討した。発情期前半9月から10月の7日間、鹿児島屋久島西部地域に生息するヤクシマザルの野生群3群のオス5頭を対象に終日個体追跡法を用いて調査した。9月から10月に時期が移行するにつれ、1日の採食時間割合(range: 30.3 - 54.4%)の減少と移動時間割合(range: 15.2 - 37.9%)・マウンティングシリーズ時間割合(range: 0 - 9.9%)の増加傾向が観察された。また、9月中は堅果食が採食時間の大半を占め、堅果1品目を1時間以上に及ぶ採食が観察された。採食時間の減少の原因は、メスの発情が10月にピークを迎え、オスが繁殖行動に時間を使うためと、長時間の採食で効率よく栄養摂取ができる堅果の結実量の減少が影響していると考えられる。この点に関しては堅果の結実量の季節的变化と採食行動の調査が必要である。今回の観察は対象個体の数、観察日数が少ないので、平成10年度は観察時間を増やすと共に、ヤクシマザルのオスの交尾様式の年齢・順位による違いについて調査を行い、オスの繁殖戦略がそのオス自身の採食戦略に与える影響について考察を行う予定である。